吉田賢抗著「新釈漢文大系 1　論語」明治書院 1960 年 5 月 25 日刊を読む

泰伯第八

193.「子曰く、詩に興り、禮に立ち、樂に成る。」

１．〈通釈〉

孔子言う、詩によって人の心に道義的な感興を起こさしめ、礼を学ぶことによって人道的規範が確立し、音楽を学ぶことによって人間の情操を整理し美化して完成する。これが教化の順序である。

２．〈語釈〉

（１）興　起こる。感奮興起する。

（２）詩　詩経に収めた詩。孔子が詩を学び、また詩を以て門人を教育したことは論語の中には屢々見えるところである。詩は孔子が「思うところ邪なし」と言ったように、人の真情の発露である。故に詩を読めば、人の心霊が感動してよびさまされる。仁斎曰く、「詩は人情に出づ。而してその美刺(ほめたり、そしったりすること)亦以て人を感ぜしむるに足る」と。

（３）立　樹立し確立する。動かされなくなる。

（４）礼　人の言動に関する基準。秩序。

（５）成　完成。息軒は「徳の成るなり」(集説)といったように、ここで徳が完成する。

（６）樂　音楽を奏し、舞を舞って楽しむこと、和楽である。人は和楽の境遇に入り得て、初めて完成するのである。

３．〈余説〉

（１）孔子の理想とした文化人の姿である。

（２）詩と楽は芸術的な要素をもつし、礼の最高は宗教的儀礼であるが、神の前に出ても恥ずかしくない儀礼的態度が持てて、詩を解し、音楽舞踊の和楽に浸り得られることによって、人間的教養は出来ると考えたのが、孔子の道徳的教養論である。

（３）孔子は、少なくとも詩のわからない、音楽の楽しめない、礼儀一遍の人でなかったことは、今までも屢々解説したところであるが、本章もこの短い語句の中に、限りなく深いものを持った人間像があることを味わいうるであろう。

P185 ～ 186

＜コメント＞

詩・礼・音楽の効用は 2500 年前の論語にもよく説明されている。よく味わい、大いに親しみ、身に着け、立派な人、人格・徳ともに備えた「君子」を目指していただきたい。

2022 年 5 月 15 日(日)